

千葉県市川市出身で、高校時代は東京学館でプレーした相川亮二氏(41)は今年10月、現役引退を表明した。捕手として横浜(現DeNA)、ヤクルト、巨人の3球団で活躍し、五輪やWBCなど3度の国際大会も経験。充実した23年間のプロ野球人生を終え、引退を決断した理由、高校時代の思い出、これからを担う世代に伝えたいこと、そして今後の夢などを語ってくれた。

現役生活に 心残りはない。 母校を甲子園に 連れていきたい。

―― 23年間の現役生活お疲れさまでした。現在の心境は？

相川 本当にやりきったという思いが強いので何の心残りもないです。現役の時、シーズンが終わってもすぐに次の準備が始まる。本当に休めるのは、3日か4日くらい。それを全くしなくていい楽しさというか。

―― 引退を決断したきっかけは？

相川 9月ごろになって、小林の他に宇佐見という新しいキャッチャーが出てきた。僕は1カ月間、出場機会がなく過ごした時に、これは俺じ

やなくてもできるなど。その棒が若手に与えられるのであれば、自分は身を引かなきゃいけないのかなと。

―― 長い現役生活の中で、あえて一番の思い出を挙げるなら？

相川 自分がレギュラーとして試合に出て優勝できるかもしれないというのが2011年のヤクルト時代。そこで、13ぐらいのゲーム差を中日にひっくり返されて負けてしまった。その年が一番思い入れがあります。

―― 2004年のアテネ五輪、2

006、2013年のWBCと3度の国際大会を経験されました

相川 アテネ五輪はオールプロというのが初めてだった。そのころ僕は、シーズンの半分くらい試合に出ていたかなというレギュラーとは言えない立場で、むしろ選ばれたくないと思っていたんですね、最初。本当に一流の人たちだけが行く場所だと思っていたので。劣等感というか、何かそういうものが自分について。でもその舞台に行って、勉強もさせてもらったし。日本を代表して野球をすることも初めてだったし、

いろんなプレッシャー、重みを感じながらプレーできた。僕はあそこがプロとしてのスタートなのかなと思うくらい時間でしたね。

―― 高校は東京学館。県内に他にも強豪校が多い中で選んだ理由は？

相川 野球ができるという環境が整っていたので。当時、ナイター設備とかグラウンドも新設されていた。学校が本気で甲子園を目指していた。もちろん強豪校もたくさんあったし、誘ってくれた高校もあったんですけど、この施設でこの環境で

10月3日のヤクルトー巨人戦終了後、両軍から胸上げられる相川氏(スポーツニッポン提供)

RYOJI AIKAWA

相川 亮二

相川亮二氏(前巨人) 独占インタビュー

企画・取材・文 江戸川大学「yell sports 制作チーム」

江戸川大学下記ゼミ所属の学生たちが「yell sports 千葉」で

企画・取材・文を担当する連載企画。

社会学部現代社会学科レジャー・スポーツマネジメントコース 広岡勲ゼミ

社会学部経営社会学科スポーツビジネスコース 小林至ゼミ

メディアコミュニケーション学部マス・コミュニケーション学科 新聞出版・文章力領域

協力：スポーツニッポン新聞社



江戸川大学
EDOGAWA UNIVERSITY



YellSports
千葉

——最後に、将来的な目標や夢などを聞かせてください
相川 野球人として、プロ野球の監督もやりたいですし、自分の母校がまだ甲子園に出ていないので、やっ

ぱり監督というのは（目標）。東京学館であれば、自分が生きている間に甲子園に連れて行ってあげたいという思いもあります。プロ野球で監督のチャンスがあれば全員がやりた

いと思うはず。チャンスがあれば行くぞというね。その準備をしないかなきゃいけないと思っています。



アテネ五輪の3位決定戦に勝利し、小林雅（右）とハイタッチ（スポーツニッポン提供）

相川 亮二（あいかわ・りょうじ）1976年（昭和51）7月11日、千葉県生まれの41歳。千葉県の市川市立第六中学校、東京学館高校から94年ドラフト5位で横浜入り。FA権を行使して08年オフにヤクルト、14年オフに巨人へ移籍した。通算成績は1508試合に出場して打率・260、69本塁打、475打点。1m83、86kg。右投げ右打ち。

野球ができるんだっただけ入学したいと思ったのが一番の理由です。
—— 高校時代の思い出は？
相川 1個上の先輩たちが千葉県ベスト4まで行って、自分たちはベスト8までしか行けなかった。ベスト4まで行けたというのが一番の思い出なのかと思いますね。あと、寮生活：2週間に1回しか実家に帰れないんですよ。で、コンビニも週1回しか行っていないんです。練習も、授業が終わるとすぐに始まり、夕食で1時間くらい休んで、その後、ナイター設備が完璧なのでとんでもなく遅い時間までやっていました（笑）。そういう時代ですね。

—— 高中生に、これをしておいた方がいいというアドバイスがあれば
相川 感性を磨くことって、すごく大きいと思うんです。技術でも固定観念が強すぎると、これしかない、こうやって打ちたい、だけですべて終わってしまふ。あとは、一流で活躍する人ってメンタルがとんでもなく強いんですね。負けず嫌いか、目立ちたがり屋とか、そういうのが全部含まれて、技術が全くなくても活躍する人もいる。その感性とメンタリティーというのは特に意識してほしい。それは小学生でも中学生でも勉強できることだと思います。

—— 今後についてですが、巨人のコーチ打診を断られたと聞きました
相川 コーチになるにあたって、どうしてもやっておきたいということがあって。自分を変えてくれたコーチは、言葉で変えてくれた。メンタルの部分なんですけど、その部分の勉強を今後していきたいなど。選手に、もっと違う自分を引き出して結果を出せるようなコーチになりたいなと思っていたので。メンタルスポーツの学校に通おうと思っています。



取材後記

23年間の現役生活を終えて、グラウンドを去ってからおよそ1カ月。笑顔が絶えないインタビューから「やり切った」という思いを強く感じました。また、厳しい勝負の世界で戦い続け、成功を収めた方の一言一言は、とても説得力があり、本当に心に刺さりました。プロ野球の監督と、母校・東京学館を甲子園に連れて行きたいという2つの夢を語った相川さんが、今後どういった道へ進むのか、ずっと注目していきたいと思っています。

学生記者／入井優樹（メディアコミュニケーション学部マス・コミュニケーション学科3年）

